名残凶蝶

ヤエ・ニンジャ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

呼吹×夜見のカプリングです。

元カノです！元カ之里さんです！

とじとも時空ではなく本編時空でのＩＦを想定してます。

短いですが、お楽しみください。

目　次

再会 ―― 1
主のもとへ ―― 4
後悔 ―― 7
懐旧 ―― 11
名残凶蝶 ―― 14

再会

一.

狭い路地を１２月の凍てつくような冷気を纏った一陣の風が駆け抜ける。

路地内には数体の影の群れが潜んでいた。その姿は一様に人間でも動物でもない異形のものだ。

風は壁を蹴り、宙を舞いながらそれらに向かって突っ込んでいき、手にした刃で斬る。

「待てっての！そっちに行くと面倒臭せーだろ！」

最後の一体が路地から出て外の人の領域に向かってその身に宿す憎悪と憤怒を撒き散らそうとしたところで、他の個体を全て斬り伏せた風が追いついてきた。

「アタシがきっちりアイシテやるから観念しろよな、荒魂チャン」

怒れる異形、荒魂を無慈悲に斬り伏せた風――七之里呼吹は嘆息した。

「ふー、これで最後か。アタシに向かってきてくれない雑魚なんていくら斬ってもつまんねーな」

目の前にはつい先ほどまで荒魂だったノロが落ちている。呼吹にすれば、荒魂を斬るのは簡単だ。だが御刀で荒魂を祓えば、再びそれらが結合する前にノロを回収しなければならない。そこまでが刀使の仕事。だが呼吹がやりたいのは斬るまでだけだ。

よって適材適所に任せるのが一番だ。制服のポケットから端末を取り出し、仲間に連絡を取ろうとした、その時。

「ッ！」

呼吹は背後でさざめく無数の気配に反応し、振り向きざま手に持った北谷菜切と二王清綱を振り抜いた。

二刀の纏う神力と剣圧に蝶の群れはあっさりと四散する。だが呼吹は構えた刀を下ろさない。路地の奥に今しがた散らした蟲たちの主が佇んでいたからだ。

「夜見、センパイか」

「おや、七之里さんでしたか。どうもご無沙汰しています」
　こちらは御刀を構えているというのにご丁寧に礼儀正しく挨拶してくる抑揚のない無機質な声に、呼吹は苦笑した。
「ほんと久しぶりじゃねえか。相変わらずガクチョーの御守りしてんだろ？」
「語弊のある言い方ですが、貴方の認識ならそれで仕方がありませんね」
　夜見の頑なな態度に呼吹がくっくと笑う。夜見の口元も少し緩んだ。そんな気がした。
「まあ、こんな風にあったのは仕方ねえ。殺るか？」
　呼吹は夜見の傍まで歩み寄って行った。しかしやはり刀は下ろさない。むしろ夜見に対して殺気すら向けていた。
　二人の立場は今は敵同士だ。そう、今は。
　呼吹と夜見はかつて鎌府の高津学長に仕える手駒だった。夜見は今もそうであるが。特殊な立ち位置であるがゆえに周囲から孤立していた二人は、対照的な性格ながら気の合う部分が多く、色々あったのだ。そう、色々。
「不毛なのでやりません。貴方と私の力では勝負がつきませんから」
　呼吹の力は荒魂を斬ること。夜見の力は荒魂を生み出すこと。そんな二人がかち合えばどちらかが力尽きるまで決着はつかない。夜見はそう言っているのだ。
「ならさっさと退いてくれ。直、あたしのお仲間が駆けつけてくる」
「仲間？」
「そうだ。あいつら、ウザくて、鬱陶しくて、とびっきり騒がしいんだ。センパイ、そういうの苦手だろ？」
　冗談っぽく言った呼吹の言葉に対して夜見はすぐに答えない。会話中にも熟考して無言になるのは彼女のいつもの癖だ。
「――七之里さん、貴方は今、幸せですか？」
「は？なんだ、いきなり？」
「……ふふ、心残り、というやつですか、ね？」
　夜見が笑った。今度ははっきりと。

その笑みの意味は長く付き合った呼吹にもよくわからなかった。
「心残りだ？相変わらず辛気臭い人だな、センパイも」
「辛気臭いというのは心外です。それより貴方の答えは……」
「ふっきーーぃ!!大丈夫ーーっ!?」
路地全体に響く大声と共にバタバタと騒がしい足音が近づいてくる。
「「っ!!」」
呼吹は思わず声の方に振り返る。走ってくるのは安桜美炎を先頭とする調査隊――呼吹の今の仲間だ。
「ちっ、夜見センパイ、さっきの話は――」
そう言って呼吹が夜見の方に再び振り返るとそこには赤茶けた色の蝶の群れが蠢くのみで、夜見の姿は既に消え去った後だった。

主のもとへ

落ちる、墜ちる、堕ちていく、ただひたすらに真直ぐ下へ。
高所から落ちた夜見の体は地面に向かって吸い寄せられるように垂直に落下していた。
それは戦い――かつての同僚である折神紫親衛隊の二人とのもの――に敗れた結果であった。
別に彼女らにとどめにと落とされたのではない。落下は夜見自身の意思だった。
二人の前で倒れれば、連れ戻されると思ったから。
――夜見の帰るべき場所はあの温かい場所ではない。
そうしなければ、二人に手を差し伸べられると思ったから。
――こんな自分をまだ仲間だと言ってくれる彼女たちの手を払いのけるのは嫌だった。
気が付けば地面はすぐそこだった。
ほどなく夜見の体が固い地面に激突する。骨が砕け、肉がひしゃげる鈍い音がした。
「……っ、ぁ……！」
体が動かない。立ち上がることはおろか、上半身を起こすことすら敵わない。
首だけの動きで周囲を見回そうとするも、真っ赤に染まった視界は世界をかろうじて半分映すだけだ。
（だめ……私は、まだ……）
それでも往生際悪く、制服のポケットに忍ばせておいたはずのノロのアンプルがどこかに落ちていないか、動く左腕で探る。右腕は既に肩から先の感覚が喪失していた。恐らくもう付いてはいない。
ついさきほどまで自分の一部だった肉片が手先に触れる。手袋越しでもはっきり感じるその不快感を無視してさらにもぞもぞと手を動かしていると割れたアンプルのガラス片が指先に突き刺さった。
（そんな……これでは……）
焦りと絶望と共に意識が急速に遠のいていく。自分が消えていく

ような感覚に夜見は恐怖した。

―――――――――――――

『夜見、今貴方は幸せ？』

いつか誰かにかけられた問いが脳裏に響く。

果たして自分は幸せなのか？問われた時答えられなかった気がするし、今も答えはわからない。

わからないが、ただひとつ言えるのは――。

『選ぶがいい。このまま朽ち果てるか、それとも刹那でも煌めき、その輝きをお前を見捨てた者に焼き付けるか』

また別の声が聞こえてきた。

よく知る誰かに似た口調。だがその淡泊な声色の中に、どこか悲しげな感情が含まれている、そんな気がした。

「私は――私が――選ぶのは――！」

目の前に差し出された紅くもやもやした光に手を伸ばす。

その瞬間、首筋に熱い何かが侵入した。ソレは体内で膨張し、活性化し、骨を造り、肉を繋いでいく。

仄暗く沈みつつあった視界が赤熱し、色を取り戻していく。それがあまりに眩しくて夜見は思わず目を瞑った。

―――――――――――――

「あ……う、ぁ……」

目を開くとぼやける視界の奥にダークグレーのスーツを着た人影が小さく映った。

遠ざかる背中に「何故」と問う余裕はない。動けるならば行かなければ、あの方の元に。

――自分の、還るべき場所に。

なんとか動けるようにはなったが体は鉛のように重い。喪失したはずの右腕で愛刀を杖代わりに突いて立ち上がる。

両目を見開き、自分の行くべき道を探す。回復した右側の視界は真ん中で真っ二つに裂けたように左側とずれ、まるで自分のものではないようだ。

とにかく前へ進もうと一歩踏み出す。その瞬間、視界が歪み、脳が

揺さぶられ、まるで自分ではない何かに侵食されるような感覚に襲われた。
「はぁ……はぁ……」
必死に呼吸を整えて自分自身の意識を保とうと努める。
荒魂の侵食がひどい。たった一歩、歩を進めただけでこれでは、果たして自分はあの方の元に辿り着けるのか。辿り着けたところでその時自分はまだ〝皐月夜見〟でいられるのか。
――わからない。ぼーっと赤熱した頭は立ち止まって冷静に思考することを許さない。
「それでも……還りましょう、あの方の元へ」
幽鬼はゆらりとその異形の体を揺らしながら、主を求めて彷徨い始めた。

後悔

刃が閃き、小型の荒魂が真っ二つに斬り裂かれる。だが斬った傍から次の荒魂が迫る。それも一匹や二匹ではない。斬っても斬っても次から次へと湧いて出る。

「へっへっへ、荒魂ぁ、チャン……アイシテルぜぇ……ッ！」

七之里呼吹はいつものように彼らへの愛を叫ぶ。だが疲労の色が濃い声は誰がどう聞いても強がりにしか聞こえない。

――もっとも、周囲にはもう呼吹と彼女を囲む大量の荒魂しかいないのだが。

こうなった原因は単純明快だ。敵の戦力の見積もりを誤ったのだ。

山中に巣くう荒魂の群れを討伐する任務。任務の内容自体はなんてことはないいつもと代わり映えしないものだった。

ただ一つ、まずかった点を挙げれば、ブリーフィングで想定される敵の数を聞いた呼吹は自分の取り分が減るからとサポート役の随伴刀使の数を減らすよう注文をつけた。それが致命的だった。

結果としてこのザマだ。荒魂の群れに包囲され、絶体絶命の窮地だ。深追いしすぎて救援の見込みも立たない。

先ほどまで近くで悲鳴だの怒声だのを上げていた僚友たちはやけに静かになっている。恐らくもう死んだのだろう。

普段の仏頂面から信じられないほど慌てた様子で、とにかく逃げろと無茶ぶりを繰り返していたオペレーターとの通信は、五月蠅くて仕方がないので今しがた切った。彼女も本来オペレーターとして優秀だが、状況に合わせた戦術指揮となれば本職の指揮官には及ばない。ましてやこの窮地だ、彼女に打開策を求めるのは荷が勝っているというものだろう。

ではこの任務も的確な指示をくれる指揮官と共に臨んでいれば結果は違っていただろうか。

（（戦闘中は指示に従いなさい、七之里呼吹））

勝手ばかりする〝問題児〟である自分を一番上手く使ってくれた隊長の顔が浮かぶ。

呼吹は首を振ってそれを脳裏から引き剥がす。何を弱気なことを言っているのだ。それより今の状況をもっと楽しまねば損だ。
「ははははっ、はぁ……はぁ……っ、そうだぜ、荒魂チャンの入れ食い状態、こんな最高の狩場っ、滅多にお目にかかれねえ！」
荒魂の爪が、牙が四方八方から襲い掛かる。呼吹はそれを迅移で加速しながら、跳んで、捻って、回って、躱す。隙あらばすれ違い様に二本の短刀で斬り捨てる。ただそれを繰り返す。いや、今はもうそれしかできないというのが正しい。
数が多すぎる。いくら斬っても包囲は全く薄くならない。途切れることなく飛来する無数の爪牙は呼吹に余計なことをする隙を与えない。写シは少しずつ傷つき、疲労から振るう刃は鈍っていく。神力の消耗で迅移も後何回発動できるかわからない。
「こりゃ、そろそろアタシもやべえな」
自身の終わりを悟ったところで恐怖の感情は湧いてこない。こんな無茶な戦い方を続けていればいずれ死ぬ、そんなことはとうにわかっていた。
（（呼吹ちゃんが傷ついて、平気な仲間がいるわけないじゃない！））
唐突に自分の身を初めて本気で気遣ってくれた人の顔が浮かんだ。
（あたしは自分のやりたいようにやってるだけだ！勝手に悲しそうな顔するんじゃねえ！）
心の中で悪態を吐く。そうしている間にも荒魂の攻撃が頬を掠める。傷ついた写シの部位からチリチリと焼けるような感触がする気がした。
（（呼吹さんは戦うのは怖くないんですか……。その傷とか、痛そう……））
今度は、自分とはまるで違う価値観を持っていた少女の顔が浮かぶ。
「怖いわけねえよ!!アタシはこれが楽しみで生きてるんだからよぉ!!」
思わず口に出して叫んだその瞬間、目の前に大型の荒魂の巨体が現れる。

「しま……ッ！がはぁぁッ!!」
視界が真っ白になり、一瞬の浮遊感の後、全身に衝撃が走る。吹き飛ばされ、地面に叩きつけられたのだ。
「クソッ、余計なこと考えてたから……ッ！」
激痛を堪え、立ち上がろうとする呼吹に蟲型や鉱型等の小型荒魂がまるで死肉に群がる亡者のように襲い掛かってきた。
「ッ、くはぁッ！」
写シが剥がれ、生身となった呼吹の体に牙が突き立ち、制服やパーカーに紅い染みが広がる。とどめとばかりに鉱型が喉笛に食いつこうとした。
「調子に、乗んなッ!!」
呼吹は大口を開けた荒魂の口に二振りの愛刀を突っ込むと、力任せに上下に裂いた。血の代わりに噴き出したノロがぼとぼとと顔の上に落ちる。
「退けよっ！」
二刀を闇雲に振り回して敵を散らすと、再び立ち上がって駆け出す。全身から深紅の血を撒き散らしながら。
もう写シは張れない。迅移も発動しない。身体は痛みと悲鳴を上げている。
だが関係ない。呼吹は荒魂を斬るために御刀を取った、荒魂を殺すために育てられた、そして荒魂をアイシテルから戦っているのだから。
正面から突進してくる狗型の頭を踏み台にして、最後の八幡力を行使して大きく跳躍する。もう死ぬのだ、どうせなら狙うは大物。群れの中でも一際大きな熊型の荒魂目掛けて斬りかかる。
「荒魂チャン、遊ぼうぜェッッ!!」
跳躍態勢から二刀を掴んだ両手を大きく振り上げる。熊型も呼吹を打ち落とそうとその剛腕を振り上げていた。
その瞬間――。
（（おーい、ふっきー！一緒に遊びに行こう！））
呼吹が周囲との間に感じていた壁をいとも容易く乗り越え、お前は

仲間だと言ってくれた少女の顔が浮かんだ。
頭をブルブル振って脳裏から消し去ろうとするが、彼女の、彼女たちの顔は消えてくれない。これが走馬灯か。
――楽しかった。みんなでしたバカ騒ぎも。荒魂を倒す以外の面倒事が多かった任務も。仲間たち（ちょうさたい）と過ごす時間は何よりも楽しかった。
（（え？もちろん、今からだよ！ふっきーに買い物、付き合ってもらうんだからね！））
だから――。彼女たちがあまりにも楽しそうに笑うものだから呼吹は今更死ぬのが惜しくなった。
「ひひっ……なあ、悪りぃけどタンマってのはなしかぁ？」
そう呟いた直後に、荒魂の巨腕が呼吹の意識を無慈悲に消し飛ばした。

懐旧

『皐月夜見と申します。よろしくお願いします、七之里さん』

初対面の彼女への印象は胡散臭い、この一言に尽きた。頭頂部だけ白髪化した髪も、人形のように無表情な顔も、態度の悪い後輩に対する馬鹿丁寧な応対もすべて胡散臭かった。

『あんたがガクチョーの言ってた夜見センパイ？ふーん、なんか辛気臭い顔してんな』

初対面の彼女の印象は流石に無作法が過ぎると思った。だが彼女はあの方のお気に入りの一人だ。わざわざ引き合わされたということは任務を共にすることもあるだろう。

だからとりあえず無難な応対をしてやり過ごした。

『私は後方から支援しますので。七之里さんは好きに斬りこんでください』

組んで見ると彼女との相性は案外悪くなかった。能力的にも性格的にも一歩引いて相手を立てることを好む彼女は呼吹が荒魂と〝遊ぶ〟邪魔とならなかった。

だから、もう少しの間文句を言わずに組んでやるのも悪くないと思った。

『夜見センパイってさ。面白れぇ体質してるよな。その荒魂、どうせ暫くしたら死んじまうだろ？任務終わったら一回斬らせてくれよ』

彼女は変わっていた。とにかく荒魂を斬ることが好きだった。だからか荒魂を出せる能力を持つ夜見に懐いてくれた。

『七之里さんはどういった経緯で高津学長に？え、私ですか？私は……』

彼女は会話の途中でもよく相手の言葉にどう答えようかと考え込んだ。最初は無口な奴だと思っていたが、こちらが自分で投げかけた

言葉を忘れた頃になって返事を返してきた時には戸惑ったものだ。
せっかちで困ったら適当に返事をしがちな呼吹には、彼女の不器用さが何故だかとても愛おしいものであるように思えた。

『センパイもよぉー、なんか楽しみとかねえの？あのガクチョーの御守りばっかじゃつまんねえだろ？ほら、やりたいこととか何でもいいから言ってみろよ、へへへ。……え、服を選んでほしいだぁ？なんでアタシが！』

付き合っているうちに彼女について意外な発見がひとつあった。頼まれると結構押しに弱いのだ。その反応が面白いものだから、時々ささやかな我儘を言ってみることにした。

『スゥ……スゥ……』

夜中の出動任務を終え、押し付けられた報告書を持って渋々学長室の扉を開けると、主の代わりに部屋を守る彼女がいた。器用なことに御刀を抱えたまま、椅子に座って寝息を立てていたが。

多忙な学長のことだ、朝までに帰ってくるとも限らないだろう。待っていたところで何がどうなるわけでもない。呼吹は舌打ちすると何か上から掛けるものはないか探しに踵を返した。

『まーた紅茶淹れてんのかよ？ほんと好きだな。え、アタシの分？……じゃあミルクはたっぷり入れてくれよな』

いつの間にか彼女とは気さくな間柄になっていた。

鎌府内で既に不気味な存在として見られるようになっていた夜見にとってある種それは救いだったのかもしれない。

彼女といると、目的のための手段と割り切りつつも、忌むべき力に手を出した後ろめたさが、少し軽くなった気がした。

『私は新たな主に仕えるために折神家に行くことになりました。少し、寂しくなりますね』

折神家の敷地と鎌府の敷地は目と鼻の先ほどの近さだ。おまけに

呼吹がよく呼ばれる研究棟はさらに折神家の敷地に近い。なのに今生の別れのような雰囲気で話す彼女がなんだかおかしかった。
だが彼女が最近その辛気臭い顔をさらに曇らせていることも呼吹は気づいていた。
やがて彼女は親衛隊としての職務で忙しくなり、徐々に呼吹とは疎遠になっていった。
呼吹に彼女によく似た人形のような顔の後輩ができたのはそれからしばらく経った後のことだった。

『よ、久しぶりだな。夜見センパイ。こっちはなーんか面倒な任務に当たっちまったぜ。伍箇伝合同で「調査隊」とか言う部隊作って、そこにアタシも放り込まれるんだってよ。ガクチョーも何考えてんだか』
どうせすぐ終わる任務だろう、と彼女は言っていた。実際、彼女はどこの部隊に配属されても変わらないだろう。ただ自身の欲望のままに荒魂を斬る、それが彼女の在り方であり、夜見が彼女を好ましく思っている部分でもある。
だが彼女はすぐに帰ってはこなかった。
結局、二人が慣れた鎌府の校内で話したのはそれが最後だった。

名残凶蝶

「全く、紗南の奴はどれだけの案件を放置していたのだ！」
高津雪那は仄暗い鎌府女学院の執務室で一人、書類と格闘していた。
もはや雪那は学長の立場にはない。タギツヒメが引き起こした一連の事件で大荒魂に加担した責任で雪那は鎌府の学長を解任されていた。
だが折神家と刀剣類管理局に伍箇伝――ひいては刀使を囲む環境全体が変革の時期にある今の状況は、犯した罪を裁かれるのを待つだけの身となった雪那さえもじっとしていることを許さなかった。
解任したはいいが、雪那の後釜はすぐに見つからず、長船女学園の学長にして特祭隊本部長である真庭紗南が鎌府の学長を兼任している。
しかし国家の心臓部を管轄に収め、伍箇伝の中でも特に折神家や刀剣類管理局との繋がりの強い鎌府の学長の職は抱える案件も多く激務だった。紗南は重要な意思決定だけ自身が行うようにすると勝手をよく知る雪那を代行役として実務処理を押し付けてしまった。繋ぎの体制とはいえ罪人である自分をバリバリ働かせるなど彼女のいい加減さはどうかしている、と雪那は思う。
「ん……これは？」
書類の中に先日の任務での殉職者の報告書があった。
殉職者が出たこと自体は由々しきことだが、長く学長を務めた雪那にとってはそれそのものは珍しいことではなかった。現役時代にはもっと多くの級友が亡くなるのも見てきた。
それよりも雪那が反応したのは報告書に記された名が彼女のよく知る名であったことだ。
「高等部一年、七之里呼吹……」
七之里呼吹――彼女は学長時代、糸見沙耶香に次ぐ手駒として重用した生徒だった。荒魂を斬ることへの強い執着に目をつけて特殊なカリキュラムで対荒魂任務の切り札として育て上げた。雪那体制の

鎌府が誇った至高の二刀の片割れ。それが彼女だった。
「死んだのか……。あのじゃじゃ馬が」
伍箇伝の学長間の政治的駆け引きの一環で、調査隊に彼女を派遣して以降、ほとんど放任状態だった。風の噂では意外な――そう、雪那にしてみれば意外なことに調査隊で得た新たな僚友と上手くやっていると聞いていたが。
「まあ、死んでしまったものは仕方あるまい。確か呼吹にはまともな家族はいなかったか？」
そこでふと思い出す。かつて彼女のことを夜見がえらく気に入っていたことを。
共同での任務遂行効率も悪くなかったため、夜見の機嫌を取る意味もあり、わざと二人を傍につけた時期もあった。
「北谷菜切と二王清綱は今のところ鎌府内に他の適合者なしか……。ふん、ならば都合が良い」
雪那は微かに寂寥の混じった笑みを浮かべると、どこからか新しい書類を持ち出した。傍らに夜見の愛刀、水神切兼光を置いて。
「持ち主を喪った二振りの御刀は水神切兼光と同じく鎌府管理とする、と」
時が流れ、新たな刀使候補たちが入学してくれば、夜見と呼吹の御刀も新たな担い手を選ぶだろう。
けれどもそれまでは――。
ほんの少しの間だけ――。
彼女たちの魂の宿る御刀を傍でいさせてやりたかった。